

入場無料
予約不要

早稲田大学演劇博物館
国際シンポジウム

— 植民地舞台にみる文化的交錯 —

日本演劇・映画人の 台湾時代

愛國婦人



2019年11月13日(水)

18:30-20:30 18:00開場

会場 | 早稲田大学小野記念講堂

定員 | 200人

言語 | 日本語(通訳なし)

発行者 |

呉佩珍 | 台湾・国立政治大学大学院台湾文学研究所所長

三澤真美恵 | 日本大学文学部教授

李思漢 | 早稲田大学演劇博物館助手

船井尚子 | 立教大学異文化コミュニケーション学部教授

後藤隆基 | 早稲田大学演劇博物館教授

主催 | 早稲田大学演劇博物館
協賛 | 早稲田大学演劇博物館(TOKYO) / P.O. Box 1000 東京府立演劇会
協成 | 平成31年度「文化庁」地域連携推進事業(早稲田大学) / 平成31年度
協成 | 平成31年度「文化庁」地域連携推進事業(早稲田大学) / 平成31年度
協成 | 早稲田大学演劇博物館(早稲田大学) / 早稲田大学

文化庁

enpaku
早稲田大学演劇博物館

*協賛先、ロゴ等 | 11/13(水)開催



日本演劇・映画人の台湾時代

—植民地舞台にみる文化的交錯—

近年、「親日台湾」というイメージが強く定着するが、1895(明治28)年からの半世紀にわたって大日本帝国の植民地だった台湾は、「土著舞臺」「生蕃舞臺」といった負のイメージを日本人の心深く刷りこんでいた。そんな日本統治下の時代、数多の日本演劇人・映画人が台湾に進出し、植民地で(舞台)を建て、植民地にある(舞台)に上がり、植民地を(舞台)に新作をつくっていた。現地在住の日本人に向けた娯楽の需要、新舞台市場の展開、植民地開発事業の一環、台湾演劇の品質向上など、理由はさまざまである。

言葉や文化が全く異なる未知の土地で、日本演劇人・映画人はどのような活動を展開したのか? 作品を通して台湾についてどのような認識を示したのか? 異文化間の衝突いかに解消したのか? シンポジウムでは、従来の日本演劇・映画史からこぼれ落ちている(台湾時代)に注目し、東アジアの文化的越境とその交錯について再考する。



川上音二郎の『元寇』の一場面 1903年初演

伊佐水演劇人との関係、
舞台 100周年記念

プログラム

- 18:30 開会
- 18:35 第1部 講演
- 日本新劇と大舞台**
—川上音二郎と大舞台(森田太郎)を中心に—
岡 佩珍 (台湾・国立政治大学大学院台湾文学研究学術専攻)
- 植民地期台湾における日本人の映画活動**
三澤 真美恵 (日本大学文学部教授)
- 日本統治期台湾における素人義太夫の発展について**
李 恩漢 (早稲田大学演劇博物館助手)
- 19:50 休憩
- 20:00 第2部 パネルディスカッション/Q&A
- 戦前の日本演劇・映画人は台湾で何をしたか**
コメンテーター
船井 尚子 (立教大学異文化コミュニケーション学部教授)
後藤 隆基 (早稲田大学演劇博物館教授)
- 20:30 閉会

*内容は都合により変更になる場合があります。
*2部・3部等のため、イベントの写真撮影・録音・録音を行いませんのでご了承ください。
*文字通り・手話通訳・視覚障害者・聴覚障害者の参加等もご希望の方は、10月30日(水)までEメールにてご希望の内容をお知らせください。ご返信のうえ、できる限りの対応をさせていただきます。
E-mail: enpaku-event@net.waseda.jp



アクセス

- 山手線・西武池袋線 高田馬場駅(早稲田口)から
都営バス「早大正門」付 所定下車 徒歩2分
- 東武東上線 早稲田駅 徒歩5分
- 都営丸根線 早稲田駅 徒歩5分

お問い合わせ

早稲田大学内博士記念演劇博物館
〒169-0050 東京都新宿区西早稲田1-6-1
TEL 03-5286-1829(平日9:00-17:00)
E-mail: enpaku-event@net.waseda.jp
Twitter: @waseda_ENPAKU
Facebook: @WasedaJENPAKUJ

